

# 文化

## 花と子どももの 画家

### いわさきちひろ 生誕100年

1956年に小学館児童文化賞を受賞し、「こどももの」で絵本を制作したちひろは仕事が増え、多忙を極めるようになる。40代に入ると、60年に童画社から出した絵本「あいうえおのほん」が大ヒット、サンケイ児童出版文化賞を受賞する。

童画家としての評価は確固としたものになったが、当時は子どもの本や教科書の仕事をする画家たちの著作権はほとんど認められていなかった。このため、画家たちは出版社による勝手な絵の改ざんや再使用に対して抗

### 月刊誌の表紙を描く

松本 猛 ⑬

## 迷い捨て代表作次々生み出す

議行動を起こす。ちひろはその中心メンバーの一人だった。数年間の活動を経て児童出版美術家連盟(童美連)が発足し、理事となる。童美連の粘り強い活動を通して、出版社も次第に画家の著作権を認め、原画も画家へ返却されるようになる。この頃、ちひろは月刊誌「子どもしあわせ」の表紙を描き



「スイートピーとフリージアと少女」1963年(ちひろ美術館所蔵)



いわさきちひろ54歳(ちひろ美術館提供)

始める。これは63年から没する74年の絶筆まで続き、ここから代表作がたくさん生まれた。掲載したのはその最初の作品である。「表紙のことば」には気概が感じられる。

「働いている人たちに共感してもらえぬ絵を描きたいと、ねがいつづけてきた私は、自分の絵に、もっと『ドロ臭さ』がなければいけないのではないかと、ずいぶん悩んできたものでした。『ドロコ』になって遊ん

でいる子どもの姿が描けなければ、ほんとうにリアルな絵ではないかも知れない。その点、私の描く子どもは、いつも、夢のようなあまさが、ただようのです。／実際、私には、どんなにどろだらけの子どもでも、ポロをもたっている子どもでも、夢をもった美しい子どもに、みえてしまうのです。／しかし、この「子どもしあわせ」の表紙は、そうした迷いをすてて、ほんとうにうれしく描けました。(中略) 迷うことなく、スッキリした、ある意味では少々モダンなものを、思いきって描こうと決心して、絵筆をとりました」

出版社との力関係も徐々に変化し、60年代半ばからちひろの絵は伸びやかになる。印刷技術の発達もちひろの絵を後押しし、柔らかな鉛筆線や、微妙なにじみの美しさも再現できるようになった。(美術評論家) <土曜日に掲載します>